

< 研究ノート >

## 老年看護学実習 後期実習における学生の学びに関する報告

# Report on the Learning of Students in Gerontological Nursing Practice Late Practice

長澤久美子<sup>1</sup>, 福岡裕美子<sup>2</sup>, 駒井裕子<sup>1</sup>

Kumiko NAGASAWA, Yumiko FUKUOKA, Yuko KOMAI

1 常葉大学

Tokoha University

2 青森県立保健大学

Aomori University of Health and Welfare

### 【要 旨】

老年看護学実習後期実習での学生の学びの内容を明らかにする目的で、研究の同意を得られた学生 41 名の「実習を通して理解できたこと」の記録内容を、質的記述的に分析した。その結果、学生は【整備・工夫された楽しく快適な環境】の調整の必要性や【高齢へのフォーマル・インフォーマルな支援】の必要性、【個別性に応じた関わり】や【高齢者に敬意を持った関わり】、【QOLの維持向上】を目指した支援、看護師に求められる役割には【健康状態の維持・管理】【経験と知識を生かした支援】【施設内外の専門職との連携】、更に専門職連携として【専門職間の相互理解】【他職種との確実な情報の交換と共有・協働】の重要性について学んでいた。以上より、おおむね実習目標は達成できたと考える。今後は更に学びが深まるよう、前期実習・後期実習を通し、実習の展開・方法の検討を重ねる必要がある。

---

Key Words : 老年看護学実習, 介護老人福祉施設, 有料老人ホーム, 学生の学び

Gerontological nursing practice, Elderly welfare facility, Nursing homes, Student learning

### 1. はじめに

わが国の高齢者人口は、平成 27 年には 26.7% であり、団塊の世代が後期高齢者となる 2025 年には 30.3% の増加が見込まれている<sup>1)</sup>。また、現在介護保険施設等で暮らす高齢者は、要介護認定を受けた高齢者の 17% (539 万人中 92 万人) を占めている<sup>2)</sup>。一方、65 歳以上の者のいる世帯のうち、単独世帯や夫婦のみの世帯は増加の傾向を示し

ており<sup>3)</sup>、今後高齢者同士の介護（老老介護）や認知症をもつ高齢者同士の介護（認認介護）等も増加することが予測される。このような背景から、看護職には高齢者の健康に関する生活調整の役割として、医療と介護の連携を実質的に担うことが期待されており<sup>4)</sup>、日本看護協会でも、生活の場である施設・在宅での看護師の系統的教育研修プログラムを実施し<sup>5)</sup>、高齢者の健康状態を全体的に支援できる知識・技術力を持つ看護師の育成を開

始している。

看護基礎教育においても、このように看護職員が担う地域支援力の強化が求められる中で、高齢患者の退院後の生活の場の理解は、今後のチーム医療・継続看護を实践するうえで不可欠である<sup>6)</sup>。そのため当学科では、3年次に老年看護学実習を前期・後期の2期に分け介護老人福祉施設および有料老人ホームにて実習を実施している。前期は施設で生活する高齢者を理解する目的で、後期は前期の学びを深め、高齢者を支える社会資源や専門職連携、施設での看護師の役割を学ぶことを目的に実習を行っている。そこで、本校では初めての老年看護学実習であることから、学生は何を学んだのか、実習記録から学びの内容を明らかにすることを試みた。学生の記録を分析し評価することは、次年度の実習に向けた新たな課題の抽出につながるものと考ええる。

## 2. 目的

老年看護学実習後期実習での学生の実習記録を分析し、学びの内容を明らかにする。

## 3. 方法

### 3.1. 研究デザイン

質的記述的方法

### 3.2. 対象

平成27年11月～平成28年1月に、老年看護学実習後期実習を終了した当学科の学生69名中、研究の同意を得られた41名を分析対象とした。

### 3.3. 老年看護学実習後期実習（以下 後期実習）について

本実習は、老年看護学実習前期実習（3年次前期）・後期実習（3年次後期）で構成され、

2単位90時間の実習である。

後期実習の目標は、①医療・保健・福祉の視点から、高齢者を取り巻く環境が理解できる。②対象の持つ健康上の課題を理解したうえで日常生活行動援助に参加し、その多様性から個々のケアプランの重要性に気づくことができる。③コラボレーションの視点から、施設における看護の役割について考える。④高齢者にとって望ましい専門職連携の在り方について述べられる、の4つである。

実習は、特別養護老人ホーム・有料老人ホームの計6施設で行い、期間は平成27年11月～平成28年1月の間に連続して5日間、各施設学生2～4名で実習を行った。

また、各施設において、水曜日・木曜日のいずれかで、「高齢者が必要とするソーシャルサポートについて－高齢者の生活を支える環境－」をテーマに中間カンファレンスを行った。さらに実習最終日に、実習施設ごとに実習目標に沿った学びのまとめを行い、発表会を実施した。

## 3.4. 調査方法

### 3.4.1. データ収集方法

後期実習最終日に提出された、実習評価表の「実習を通して理解できたこと」の内容を分析した。尚「実習を通して理解できたこと」の記載は、実習目標ごとに沿って記載されている。

### 3.4.2. 分析方法

学生の記述文章を繰り返し読み、学びの内容を確認した。その後、それぞれの目標に沿って、意味のとれる文脈に注目し、句点から句点を1文脈として切り取った。そして、文脈を損なわないよう学生の言葉を用いながらコード化した。さらに、コードの意味内容の類似性に着目し、複数のコードのまとまりをつくり、サブカテゴリーを抽出した。その

後、それぞれの教員が抽出したサブカテゴリーを、学生の学びの類似性や相違性に注目した上で比較検討し、カテゴリーを抽出した。データ分析は、ソフトウェアは使用せず老年看護学の教員2名で行った。作成したコーディングリストを分析者相互に確認し、カテゴリー・サブカテゴリーの名称や類似性について調整し、決定をした。

#### 4. 倫理的配慮

研究対象となる学生には、研究の目的・方法・意義・活用方法について文書と口頭で説明をした。また、研究の協力は自由意志であり、途中放棄の権利が保障されていること、研究参加の如何は成績に一切影響はないこと、成績評定後分析を行うこと、個人情報のお守秘について、データの匿名性の確保について、文書と口頭で説明を行い、同意した者には同意書の記載の提出を依頼した。尚、常葉大学の倫理審査委員会の承認を受けている。

#### 5. 結果（表1）

【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリーとする。

後期実習における学生の学びを各目標に沿って分析した結果、目標1では【整備・工夫された楽しく快適な環境】【高齢へのフォーマル・インフォーマルな支援】、目標2では【個別性に応じた関わり】【高齢者に敬意を持った関わり】【QOLの維持向上】、目標3では【健康状態の維持・管理】【経験と知識を生かした支援】【施設内外の専門職との連携】目標4では【専門職間の相互理解】【他職種との確実な情報の交換と共有・協働】のカテゴリーが抽出された。以下、目標ごとカテゴリーに沿って、その内容を記載する。

表1 後期実習における学生の学びの内容

目標	カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
1 環境 理解	整備・工夫された楽しく快適な環境	他職種連携による整備・工夫された環境	6
		楽しく快適な生活の場である環境	14
		家族が存在する環境	4
	高齢者へのフォーマル・インフォーマルな支援	高齢者の生活を支える社会資源	11
		地域で支える高齢者の生活	2
2 ケア プラン の 重要 性	個別性に応じた関わり	観察の重要性の認識	41
		ニーズを把握し今後の方向性を把握	27
		効果的なコミュニケーションの活用	6
		個々の特性に併せた対応	3
	高齢者に敬意を持った関わり	高齢者のプライドの尊重	15
		高齢者に寄り添う気持ち	15
	QOLの維持向上	危険を予測した援助	16
		高齢者の意思の尊重	15
		残存機能の維持を目指す援助	22
		利用者同士の関係の調整	4
3 看護 師の 役割	健康状態の維持・管理	健康状態のアセスメント	3
		情報共有しつつ健康状態の維持・管理	6
	経験と知識を生かした支援	施設の看護師は経験と知識が重要	3
		その場ですぐに対応できることが重要	2
		高齢者の身体状況について他職種と相談・連携	1
施設内外の専門職との連携	施設で連携する人々への教育	3	
	医療機関との連携	1	
4 専門 職 連 携	専門職間の相互理解	専門職同士の尊重と理解	16
		専門職としての責任	7
	他職種との確実な情報の交換と共有・協働	情報共有の重要性	18
		確実で適切な情報交換	14
	利用者を支える多職種の存在と連携	12	

5. 1. 目標1: 医療・保健・福祉の視点から、高齢者を取り巻く環境が理解できる。

##### 5. 1. 1. 【整備・工夫された楽しく快適な環境】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、《他職種連携による整備・工夫された環境》《楽しく快適な生活の場である環境》《家族が存在する環境》が抽出された。

《他職種連携による整備・工夫された環境》の具体的な内容を例示すると、「看護師や介護士の記録の共有等で、高齢者個々に対して適切な援助への環境づくりに結びつく」の記述や、《楽しく快適な生活の場である環境》の例示では、「高齢者の生活の充実を目指し、(人として) 当たり前前の生活ができるようにサポートしていた」の記述、《家族が存在する環境》の例示では、「家族のサポートにより本人も安心して生活できる」の記述が見られた。

以上のように学生は、高齢者が毎日生活する場として、他職種連携により楽しく快適な生活の場や、家族とのつながりを持つように環境が調整されていたと捉えていた。

### 5.1.2 【高齢者へのフォーマル・インフォーマルな支援】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、「高齢者の生活を支える社会資源」「地域で支える高齢者の生活」が抽出された。

「高齢者の生活を支える社会資源」の具体的内容を例示すると、「家での生活が困難な高齢者のために、施設やサービスが利用できるような制度が整えられている」の記述や、「地域で支える高齢者の生活」の例示では「今後高齢者の増加に伴い、地域で高齢者を支えるサポートが必要」の記述が見られた。

以上のように学生は、高齢者の生活の場に入り込んでいる社会資源によって、施設を含めた地域全般の中で生活しやすい環境が調整をされていると捉えていた。

## 5.2. 目標2：対象の持つ健康上の課題を理解したうえで日常生活行動援助に参加し、その多様性から個々のケアプランの重要性に気づくことができる。

### 5.2.1. 【個別性に応じた関わり】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、「観察の重要性の認識」「ニーズを把握し今後の方向性を把握」「効果的なコミュニケーションの活用」「個々の特性に併せた対応」が抽出された。

「観察の重要性の認識」の具体的内容を例示すると、「健康上の課題を理解するためには、過去の状況も加味しての観察が必要」との記述や、「ニーズを把握し今後の方向性を把握」の例示では「高齢者のニーズを把握しどこに向かうのか理解して援助が必要」の記述、「効果的なコミュニケーションの活用」

の例示では「意識してゆっくりと大きな声で視野に入る位置で話しかけること」、「個々の特性に併せた対応」では「気分変動の激しい人には、不安を与えないように細かい点に配慮し関わる必要がある」の記述が見られた。

以上のように学生は、様々な背景の高齢者に対し観察し、ニーズを把握し、個別性に応じた関わりが重要であると捉えていた。

### 5.2.2. 【高齢者に敬意を持った関わり】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、「高齢者のプライドの尊重」「高齢者に寄り添う気持ち」が抽出された。

「高齢者のプライドの尊重」の具体的内容を例示すると、「傾聴するだけでも、生き生きされる方が多く、その重要性に気付かされた」との記述や、「高齢者に寄り添う気持ち」の例示では「その高齢者にあった接し方や寄り添う援助により、高齢者の安心できる生活を提供できる」の記述が見られた。

以上のように、傾聴の姿勢は高齢者に対しての敬意の念を含むものであり、学生は人生の先輩である高齢者に対して、プライドを尊重し、寄り添うこと、敬意を持って関わるということが重要である、と捉えていた。

### 5.2.3. 【QOLの維持向上】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、「危険を予測した援助」「高齢者の意思の尊重」「残存機能の維持を目指す援助」「利用者同士の関係の調整」が抽出された。

「危険を予測した援助」の具体的内容を例示すると、「ケアの前に利用者の問題点について把握しておく」の記述や、「高齢者の意思の尊重」の例示では「本人や家族の希望を第一に考え、それに沿ってケアをしている」の記述、「残存機能の維持を目指す援助」の例示では「高齢者にはできることは促し、見守り、残存機能の維持ができるよう援助」、

《利用者同士の関係の調整》の例示では「友人関係を作れるような促しも大切」の記述が見られた。

以上のように学生は、先を見据えて危険を回避しつつ、高齢者の意思の尊重や残存機能の維持が重要である、と捉えていた。

### 5.3. 目標3：コラボレーションの視点から、施設における看護の役割について考える。

#### 5.3.1. 【健康状態の維持・管理】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、《健康状態のアセスメント》《情報共有しつつ健康状態の維持・管理》が抽出された。

《健康状態のアセスメント》の具体的内容を例示すると「毎日高齢者の健康状態を観察・アセスメントする必要がある」の記述や、《情報共有しつつ健康状態の維持・管理》の例示では「高齢者の情報をチームで共有し、健康状態を維持することが必要」の記述が見られた。

以上のように学生は、健康状態の維持・管理のために、高齢者個々についてアセスメントを行い、情報をチームで共有し、健康状態を維持することが看護師の役割の一つであると捉えていた。

#### 5.3.2. 【経験と知識を生かした支援】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、《施設の看護師は経験と知識が重要》《その場ですぐに対応できることが重要》が抽出された。

《施設の看護師は経験と知識が重要》の具体的内容を例示すると「看護師は、判断を委ねられることも多く、施設では経験と知識が重要」の記述や、《その場ですぐに対応できることが重要》の例示では「施設における看護師の役割は、（どのような状況でも）その場に対応できる事が重要」の記述が見られ

た。

以上のように学生は、看護師は施設の高齢者の健康管理を担う立場として、今までの看護の経験や知識を生かし、その場で判断し対応できるケア等を担っていると捉えていた。

#### 5.3.3. 【施設内外の専門職との連携】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、《高齢者の身体状況について他職種と相談・連携》《施設で連携する人々への教育》《医療機関との連携》が抽出された。

《高齢者の身体状況について他職種と相談・連携》の具体的内容を例示すると、「看護師には、栄養士へ食事の相談や医師への疾患に関する相談など、他職種への連携が求められる」との記述が見られた。また《施設で連携する人々への教育》の例示では「看護師は、施設スタッフたちに、医療面の説明を理解してもらえるように説明することが重要」の記述、《医療機関との連携》の例示では「医療機関との連携などが看護師に求められる役割の一つ」の記述が見られた。

以上のように学生は、施設においては、施設内・施設外の専門職に、高齢者の身体状況について相談・連携、また必要時に看護職以外のスタッフへの教育が、看護師の役割の一つであると捉えていた。

### 5.4. 目標4：高齢者にとって望ましい専門職連携の在り方について述べられる。

#### 5.4.1. 【専門職間の相互理解】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、《専門職同士の尊重と理解》《専門職としての責任》が抽出された。

《専門職同士の尊重と理解》の具体的内容を例示すると、「互いの職種の役割を認識し、理解して尊重することが重要」の記述や、《専門職としての責任》の例示では「それぞれが専門職としての責任を持ち、丁寧に情報を共

有することで正確な援助をスタッフ全員が目指すことができる」の記述が見られた。

以上のように学生は、それぞれの専門職が相互に尊重し合いながら、専門職としての責任を果たすことが重要であると捉えていた。

#### 5.4.2. 【他職種との確実な情報の交換と共有・協働】

本カテゴリーのサブカテゴリーでは、《情報共有の重要性》《確実で適切な情報交換》《利用者を支える多職種の存在と連携》が抽出された。

《情報共有の重要性》の具体的内容を例示すると「チームで個々の利用者の全体像を把握し、共通認識を持ち関わるのが大事」の記述や、《確実で適切な情報交換》の例示では「高齢者個々に対する他職種間の情報共有は確実に明確に行うことが重要」の記述、《利用者を支える多職種の存在と連携》の例示では、「高齢者は、様々な医療・保健・福祉分野からのサポートにより、施設内で生き生きと暮らせるよう支えられている」の記述が見られた。

以上のように学生は、専門職同士が情報を共有し、協働することが利用者を支えることにつながると捉えていた。

## 6. 考察

老年看護学実習後期実習は、前期実習を踏まえ、3年次後期に開講している1週間の実習である。前期実習の学び<sup>7)</sup>と今回の結果を踏まえ、目標に沿って以下に考察する。

### 6.1. 医療・保健・福祉の視点から、高齢者を取り巻く環境の理解についての学び。

前期実習の環境に関する学びは、「建物の構造」「組織運営に影響を受ける環境」「スタッフによる生活支援環境」に関する内容であった<sup>7)</sup>。後期実習では、施設内の【整備・

工夫された楽しく快適な環境】に加え、《高齢者の生活を支える社会資源》《地域で支える高齢者の生活》など【高齢者へのフォーマル・インフォーマルな支援】等の、高齢者を取り巻く社会環境を含めた広い視野での環境を捉えることができた。また、中間カンファレンスでの実習指導者からのアドバイスにより、内容は更に深めることができたと考える。

わが国では、高齢者人口の増加を踏まえ、地域包括ケアシステム<sup>8)</sup>や新オレンジプラン<sup>9)</sup>等から、高齢者の生活は施設だけではなく、地域にも広がっている。そのため、看護職員が担う地域支援力の強化が求められており<sup>6)</sup>、看護基礎教育においても、高齢患者の退院後の生活の場の理解は不可欠である。従って、施設における一ヶ所に限られた環境だけではなく、広い視野での環境の捉え方が重要である。

以上のことから、疾病発症や体調不良で入院した高齢者が、病院から地域へと退院する際に、看護師が高齢者施設や在宅での社会資源を含めた環境を知っていることは、非常に重要であると考えられる。そして、今後の社会の流れに対応するためにも、施設実習における環境や社会資源のキーワードを重点的に捉える必要がある。

### 6.2. 対象の持つ健康上の課題を理解し、日常生活援助に参加した上での、個々のケアプランの重要性についての学び。

前期実習では、主に介護士に同行して日常生活援助の見学を中心に実習を行い、その人に必要な援助をイメージできることを目標とした。後期実習は、介護士及び看護師の同行実習を中心に、日常生活援助や医療的処置を一緒に実施・見学をした。その中で学生は、【高齢者に敬意を持った関わり】を行いつつ、【QOLの維持向上】を目指し【個別性に応じた関わり】が重要である、と学んでいた。

近年は、世帯構造の変化により、高齢者と同居したことの少ない学生が増加している（厚生労働省，2016）<sup>3)</sup>。高齢者観の明確でない学生は、ともすれば高齢者を、身体機能や認知機能が低下し、徐々に衰えていく存在であると否定的な面のみを捉えやすいと推測できる。しかし前期実習では、高齢者の身体的・心理的・社会的特徴を把握したうえで「高齢者は、個性的で多様性」があると捉えていた<sup>7)</sup>。後期実習では、それらの学びをベースに、コミュニケーション方法を工夫し関わった。このことから、長い間生きてきた方々への援助には、高齢者のプライドや思いを尊重し、寄り添うことが必要であることに気づいた。また、人それぞれの性格・価値観の違いは長い人生での経験が大きく影響していることや、罹患した疾患名は同じでも症状の出現は異なること等から、個々の背景や症状を観察し、その人にあっただ対応方法を模索する必要があることを、実習を通して改めて気づいた。更に、身体機能の低下が見られる高齢者も、生活の場である施設では、残された機能を生かすために生活リハビリを行い、楽しみを持ちながら生活することが重要であることも学んでいた。

### 6.3. コラボレーションの視点から、施設における看護師の役割についての学び。

本実習では、1日施設の看護師に同行し実習を行っている。その中で学生は、看護師が【経験と知識を生かした支援】を実施し、高齢者の【健康状態の維持・管理】を行っていたことに気づいていた。たとえば、医師の常駐していない高齢者施設での健康管理は、入居者の変化が見られたときなど、即座に適切な判断や対応が求められる。そのため、施設で働く看護師には、特に正確な知識や適切な判断力が求められることに気付いた。また、それらは看護師としての長年の経験に裏打ちされていることを学んでいた。

また、看護師の役割は、保健師助産師看護師法<sup>10)</sup>では「傷病者若しくは褥婦に対する療養上の世話又は診療の補助」と規定されている。このことから、日常生活援助も看護師の役割の一つであるが、高齢者施設においては、介護士との役割のすみわけをしていることに学生は気づいていた。従って、日常生活を中心に行う介護士に対しても、看護師は医療面での教育的な役割を担っていることを学んでいた。

更に、高齢者の身体状況について他職種との相談や連携、介護士への情報提供や他医療機関と情報交換等の、【施設内外の専門職との連携】が行われていることに気づいていた。道繁<sup>11)</sup>は、介護老人保健施設等での実習の学びには、施設における看護職の役割の必要性や看護職が多面で活躍できると認識できたことを述べているが、本実習についても同様に、施設における看護師の存在の重要性や看護師が必要とされる職場の多様性について、本実習を通して、より実感し認識できたと考えられる。

### 6.4. 高齢者にとって望ましい専門職連携のあり方や理解についての学び。

実習施設である特別養護老人ホームや有料老人ホームでは、看護師や介護士を始め、医師・リハビリ専門職・栄養士・相談員・ケアマネージャー等の多種の専門職が働いていた。

今回の実習では、介護士同行と看護師同行の実習を行ったため、両面からの視点で連携について考えることができた。

前期実習では、日々の看護・介護記録の共有や随時口頭での情報交換、連絡・相談の徹底、異なる職種間の相互理解を得ることの必要性を学んでいた<sup>7)</sup>。後期実習では【専門職間の相互理解】をはかり、それぞれの専門職が相互に尊重しながら、専門職としての責任を果たすことの重要性や、専門職同士が情報

を共有し協働するために【他職種との確実な情報の交換と共有・協働】を行うことが、利用者を支えることになるかと学んでいた。このように、前期実習を踏まえ、望ましい専門職連携のあり方について、さらに学びを深めることができていた。

神山<sup>12)</sup>は、看護師・介護士・リハビリテーション関連職種・栄養士を対象に行った調査において、各専門職が自己の職種の専門性と弱点を認識し、他職種と連携して弱点を補完しようとしていた、と述べている。このように、それぞれの専門職種が自己の特徴を知り連携することで、相互の理解や相互の補完が進み、更なる協働の体制が整うのではないかと考える。看護学生の多くは、今後臨床に出て看護師として働く。看護職には医療と介護の連携を実質的に担う役割があることから<sup>4)</sup>、このような意識を持ち従事することで、より患者や入居者の思いに沿った支援が展開できると考える。

#### 6.5. 今後の課題

以上の結果より、おおむね実習目標は達成できたと考えられる。

本校の老年看護学実習は前・後期に合わせて2単位の实習であり、前期の学びを踏まえ後期の学びを深める、という内容となる。しかし、前期と後期の期間が開くことで後期実習では振り返りに時間を要すことや、学生によっては実習施設が異なるため、慣れるまでに時間がかかる可能性がある。これらのことより、学びの定着の効率を図るためにも、実習時期の検討や同一施設での実習を行うことの検討が必要であると思われる。また、学生は「高齢者に敬意を持ち関わる」ことの必要性は学んでいた。しかし、高齢者と接する学生が減少する中で、「敬意を持ち関わること」や「適切な高齢者観が持てること」に関する実習目標を更に追加し、学びの強化を図る必要があると考える。具体的には、実習指導者

との連携を図りながら、具体的な実習場面でのアドバイスの依頼や、学生同士のカンファレンスのテーマとして提示する等、学びが深まり、継続するような学生支援が必要であると考える。

#### 7. 結論

後期実習では、4つの目標をもとに、介護士・看護師の同行実習と中間及び全体カンファレンスを行い学びの共有を行った。実習における学生の学びの記述から分析した結果、学生は、【整備・工夫された楽しく快適な環境】の調整や【高齢者へのフォーマル・インフォーマルな支援】の必要性、【個別性に応じた関わり】や【高齢者に敬意を持った関わり】【QOLの維持向上】を目指した支援、看護師に求められる役割には【健康状態の維持・管理】【経験と知識を生かした支援】【施設内外の専門職との連携】、更に専門職連携として【専門職間の相互理解】【他職種との確実な情報の交換と共有・協働】の重要性、の学びを得ることができた。

後期実習では、学生は多数の高齢者と関わり、介護士や看護師のケアプランの展開や介護観・看護観に触れ、他職種とも関わる中で、看護職として高齢者を取り巻く環境や支援・専門職連携について学ぶことができ、おおむね実習目標も達成できていた。

今後は更に学びが深まるよう、前期実習・後期実習を通し、実習の展開・方法の検討を重ねる必要がある。

#### 【引用文献】

- 1) 総務省：統計からみた我が国の高齢者（65歳以上）  
<http://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topics90.pdf>, 2015, アクセス2016,9,12
- 2) 厚生労働省：社会保障審議会介護保険部会（第48回）資料2,



- <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/0000025314.pdf#search='%E6%96%BD%E8%A8%AD%E5%85%A5%E5%B1%85%E8%80%85%E6%95%B0'>, 2013, アクセス 2016.1.16
- 3) 厚生労働省：平成 27 年度国民生活基礎調査の概況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/dl/02.pdf>, 2016, アクセス 2016.9.12
- 4) 小林孝子, 仁科聖子, 松尾淳子 他：介護保険施設における高齢者ケアの看護・介護の協同・連携に関わる看護職の実践. 大阪医科大学看護研究雑誌 5, 65-75, 2015
- 5) 日本看護協会：介護施設における看護職のための系統的な研修プログラムのご提案. <https://www.nurse.or.jp/nursing/professional/kangoshi-2/pdf/jitsumusha.pdf#search='%E7%B3%BB%E7%B5%B1%E7%9A%84%E6%95%99%E8%82%B2%E7%A0%94%E4%BF%AE%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0+%E7%9C%8B%E8%AD%B7%E5%8D%94%E4%BC%9A'>, 2012, アクセス 2016.1.16
- 6) 厚生労働省：看護基礎教育のあり方に関する懇談会論点整理. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/07/s0731-8.html>, 2008, アクセス 2016.1.17
- 7) 駒井裕子, 福岡裕美子, 長澤久美子：老年看護学前期実習における学生の学びに関する中間報告. 常葉大学健康科学部研究報告集, 3 (1), 11-19, 2016
- 8) 厚生労働省：地域包括ケアシステム. [http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/), 2015, アクセス 2016.1.16
- 9) 厚生労働省：認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）
- [http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiboushitaisakusuishinshitsu/01\\_1.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiboushitaisakusuishinshitsu/01_1.pdf), 2015, アクセス 2016.9.7
- 10) 総務省：保健師助産師看護師法 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S23/S23HO203.html>, 1948, アクセス 2016.9.7
- 11) 道繁祐紀恵, 奥山真由美, 甲谷愛子 他：介護老人保健施設及びグループホームにおける認知症高齢者に対する看護学生の学び. 山陽論叢 21, 43-53, 2014
- 12) 神山悦子, 志田久美子, 小林由美子 他：高齢者ケアを実践している専門職の専門性・弱点に関する認識と他職種連携. 新潟医療福祉学会誌 12 (2), 41-47, 2012

